

小学校英語教科化に向けたチーム・ティーチングを生かした教員研修モデルの開発

町田智久(国際教養大学 専門職大学院 准教授)

本研究の背景

文部科学省は、2020年からの小学校5・6年生に対する英語の教科化の方針を示した。しかし、英語を指導する小学校教員全てが英語の研修を受けている訳ではなく、指導に対する不安も大きい。また、研究者からはこれまでの研修が指導理論中心で、教員の基礎的な英語力の養成が不足しているという指摘がなされていた。そのため本研究では、小学校教員の基礎英語力と英語指導力の向上に必要な要素を、学校現場での1年間のチーム・ティーチングを実施する中から分析し、それらの要素を組み込んだ教員研修モデルを作成した上で、今後の教員研修に生かしていくこととする。

研究の方法

研究代表者と学級担任とのチーム・ティーチングを1年間継続的に実施し、学級担任の基礎的な英語力及び英語指導力の養成を図った。学級担任は、秋田県内の公立小学校教員(教員経験25年)である。質的・量的な分析方法を用いてその変化を捉えることとした。

結果と考察

学級担任の英語指導に対する不安の値は、チーム・ティーチングでの授業実践を進めるにつれて下降していった。外国語不安の軽減とともに、学級担任の外国語活動の授業に対する意識や意欲も変わっていき、次第に授業中の指示や説明も英語で行われるようになっていった。TOEICのスコアも上昇し、英語使用の正確性も増していった。次第に児童が英語力を向上させる様子を見た学級担任は、「子どもたちが頑張っている様子を見て、自分も努力しなければいけないと思いました」と答え、自身の英語力向上のための努力を始めた。児童のためにより良い授業をしたいという教師としての責任感が、教師に変わるきっかけを与えた。英語の指導力についても、チーム・ティーチングでの授業や打ち合わせを積み重ねる中で、学級担任は目標(めあて)の重要性や指導手順など、他教科指導で培った技術や経験を応用し始めるようになった。

学級担任は自分の発する英語に自信を深め、それが更なる英語の使用につながり、結果的に児童に対する英語のインプット量も大きく増加することとなった。

教員研修モデルの開発

本研究の結果から、小学校英語教科化を見据えて「外国語不安の軽減」「効果的な指導手順」「英語を使った指導体験」を研修内容に組み入れた、3日間(90分×3回)の校内研修のための研修モデルを作成した。その際に、集合研修ではなく、どのような地理的環境にある小学校の教員でも参加できるように、各小学校の校内で実施する校内研修での実施を念頭において作成した。

回	内容
第1回	講義・演習「外国語不安を軽減しよう」 外国語使用時に感じる不安について学ぶとともに、参加者自身の不安状態についても認識する。また、英語で授業をすることの重要性や児童のロール・モデルになることの必要性を学ぶ。
第2回	講義・演習「効果的な指導手順を学ぼう」 英語で授業をする上で有効な英語表現を学び、練習する。また、「めあて」の重要性など、他教科で培った授業の方法や手順を英語の指導に生かす方法について学ぶ。
第3回	講義・演習「英語を使った指導を体験しよう」 ALTや他の教員とのチーム・ティーチングの場面を設定し、どのように英語で授業を進めていったら良いのかを疑似体験する。

まとめ

新年度からは、この研修モデルを実際に秋田県大仙市内の各小学校で実施しながら、より完成度の高い研修へと作り上げていく。もちろん、教師は研鑽を続けなければならないが、3日間の研修ですべてが解決する訳ではない。しかし、英語学習初期段階に関わる小学校教員が、英語指導に対して変わることで、児童の英語力は大きく伸びていくことができる。そのためのきっかけとして、本教員研修モデルを活用していきたい。

共同研究者 高橋規子(大仙市教育委員会)